新編

四集之

金瓶梅

四長寫聲作

李保樸玉貞面

目泉筆

梓

南湖

湖庄

新編金瓶梅第四集

上帙

丙申孟春
甘泉堂板

へ13
4454
7

よ　このえんへんきんべのおの　なんでん
予が這新編金瓶梅の原傳る唐山の稗史金瓶梅の後人の嗣出せる後編の
のうそよ
一書あり名けく三世教誡簫花影との作者の名跡を著せざれど何人の筆也
さえせきうくれんをあの　ちょ
ると知らず但四橋居士の序あるのみその書四十八回西門啓が身後の妻
ひゃくせんま　んく
悪報の其妻その子ゐ輪回そ百折千磨の艱苦を嘗り最後の鮮脱の一編を結局
けつきょく
とも蓋作者の意匠彼前傳一百回ゐ西門啓が一世の荒淫驕れる形勢を旨と
ろうでんくれんくつあの　もと　ろうでんくれんくつあさ
綴りて因果応報の段尚淺りあの故ゐ後傳隔簾花影ゐ他が生前の為体い
つまびらかせず
僅數行ゐ省略そ身後の業果を詳ゐ積不善の家ゐ餘殃ある天理を茲ゐ
ようやく
祥彰そ勧懲とあるえ抑件の冊子ゐ西門啓を南宮吉とそその妻呉月娘を
せのりんけいをきゅうきつ
楚雲娘とそその子孝哥を慧哥とそその僕玳安を兼定とも係る類るれきりそその姓
名ゐ異なれどもその人の相同じ一帙都て八冊あり今此間ゐ稀る者尤珍書とのみべし

ども前傳の荒淫奸詐を厭ふそ專因果業報の道理を宗と示せるそ一部の趣向そ
ありふるく華やかる文絶て无く亦巧なるゐもあらざれば又憑りぎるゐもあらざるよ
金瓶梅ゐ金瓶花影両傳の趣ゐ憑るまあらざるよ前集の自
叙ゐいへる如く且原傳金瓶梅ゐ武松が事ゐ水滸ゐ譲りそ省略せゐ遂憾ゐ欠ら
因て五吾這冊子ゐ武松ゐ擬ゐ武二郎が本末そ具ゐて善悪天理彰然る鑒誡の一端
とも世ゐ彼原傳二書そ見て後ゐ是書そ閲る者ゐ予が言そ俟ずして是等の差別を知
るもあん去歳ゐ五吾庵ゐ文のふくて仲冬よりゐの四集の為ゐ筆を執りが深く思ひを
凝らまよ遑あらざ況本集の趣向ゐ五集六集の襯染ゐ終れるも是等よあらねば尚幾十
巻の後々ゐそ閲る隨ゐ解分られて看官のふく佳境ゐ入る歟。

天保七年春正月吉日續出新板　物の本丸作者　馬琴みつる序ス

明らかなるを
鏡のおとく
清れこせ
水に似たり
燕子花
鏡が
池乃
服紗かれ

野鼠穴市

鳥屋尾前司充忠

身は是處女にて
文あり武あり並頭誰か欲
する粧ひ芙蓉のあるぞ正に是
池水の藍よりなりてかれり
婆ヨメ

楠一味齋之女兒 千早

楠が妻 樹石

親の權と笠着に
あら偽登りつめてる
恋の山顔ゆも
恥ぬ已惚ハ日
本一の阿放の鏡
馬鹿につけぬる菜
賣と二ふく對るる
かたるしハ是
岡穂植る
山のたやし欣
馬糞鷹

半閑

萬病丸

斧形曳水

船舘苫四郎
遠景

蟻の細にあれてる
駒下駄ハ繋
ぐとゆこのこ
かこれハ二路かけし
てれんてくぐ
る煉る管に一夜さの
夢の浮橋にてるをみれば
ちなちやほあしこの
客やぬくめるる

岩坂
苫六知義

浮世袋屋
蓋道

淡路嶋を直下にみて
須磨の関取と喚ぶとも僧
むべし邪智も赤千方人に敵
横嶋軍領
浦主
活仁王
利金太

非義非道欲
ちぶ
の
果や
仁王
の
ちから
義をみて勇めど
ちから足らざるに力士の資を得て
かへて怨い磯うろ波の岩をも
碎く是ぞまの
漉きれの海苔の
しづくや淡路嶋
淡路嶋
施恩吉
施恩吉が
女兄
衿梨

瓶
寒

潮

意
合

弐

左の上へ

左の上へ

右の下へ

つきへ

甘泉堂手版畧目録

遠州流 千松庵一樹先生撰
秘傳入 **挿花初學** 全四巻

遠州流 春柳庵一州先生撰
挿花柳枝緑 全四巻
千松庵一樹先生撰

大日本國之全圖 彩色 大日本六十餘州一の宮郡名城下及陣營方角 一枚摺

常盤百人一首大全 中本全冊 出来

麗玉百人一首 小本 全冊

百人一首本 中本 小本 數多出来

諸往来本 大本 中本 數多出来

武者繪本一代記 全三冊 全冊數多 粘入摺 各袋入

馬琴作
國貞画

上帙
下

芝神明前
泉市新板

新編

金瓶梅第四集之弐

馬琴作

國貞画

天保七年丙申春嗣出

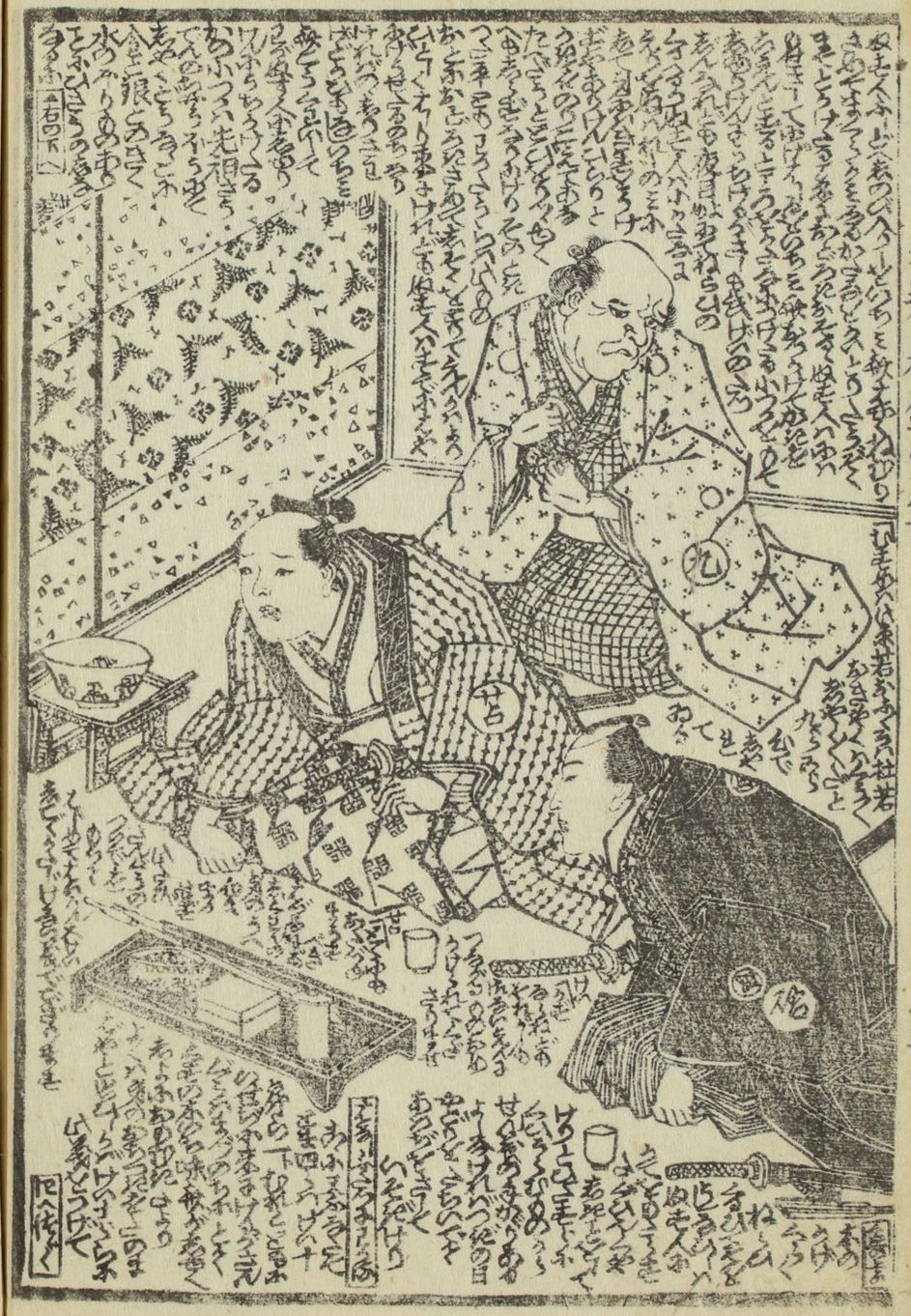
甘泉堂精刊

松

施
仕

石

楠



石
実

九
石

立意
僧
九

前
苔

馬琴作
國貞画
家傳神女湯
精製奇應丸
熊胆黒丸子
婦人一包六十文
製茶本家 神田明神下 滝澤氏
弘所 元旧町中坂下南側

天保七年申春發市

新編金瓶梅 第四集 上帙下帙 曲亭馬琴作 香蝶樓國貞画

金毘羅舩利生纜 第九編 第十編 曲亭馬琴作 一勇齋國芳画

風俗伊勢物語 三編四編 東里山人作 五雲亭貞秀画

昔摸様娘評判記 全六冊 山東庵京山作 香蝶樓國貞画

勝角力二代顔觸 全六冊 式亭小三馬作 香蝶樓國貞画

甘谷太平記白石噺 全四冊 四浮山人作 五雲亭貞秀画

美艶仙女香 一包 京橋南傳馬町三丁目西ゲハ 黒油美玄香 坂本氏製

江戸芝神明前三嶋町中程 地本問屋 和泉屋市兵衛版

特別
へ13
4454
7